



\* 第3回 \*

## 西山恵美子

株式会社テレビ東京 技術局 制作技術部

### 放送局のエンジニア・ 音声ミキサーとして

#### はじまり

今、考えてみると小学生の頃、父親の購入したラジカセが今の仕事のきっかけになったのかもしれませんが。野球中継を聞くための簡単なラジカセでした。初めて買ったレコード（いわゆるLP）に何度も針を落とすことが躊躇され、ラジカセの持ち手についているなんちゃってマイクを、ステレオのスピーカに近づけて録音したことを覚えています。

家のすぐ近くには7分間隔で運行するモノレールが走っており、当時その大きな走行音に悩まされました。曲の長さを調べ、1曲ずつの録音。モノレールが通り過ぎ、静かになった瞬間に録音ボタンを押してレコード針を落とす。時には階下から夕飯を知らせる母の声もして…。息を殺して曲の終わりを待つその時間はとても緊張感のあるものでした。

11歳のころ登場したのが、その後大ヒットした携帯カセットプレーヤ。欲しくて欲しくてやっとのことで親の許しを得、これも相当緊張して当時中学生の姉と二人、はるばる秋葉原まで買いに行きました。「秋葉原は値切り交渉ができる」という当時の定説に基づき挑戦しましたが、店員さんが怖く断念。定価3万3千円で購入しました。

この後、流行にのってまんまと父親が大型ステレオを購入。何もかもライ

"As the Engineer of a Television Station" by Emiko Nishiyama (TV Tokyo Corporation, Tokyo)

ン収録できる喜びに浸り、本当にいろいろな素材をカセットテープに収録してはウォークマンで聞くという毎日をご過ごしていました。

#### 進路

本格的に将来音の仕事につきたいと思ったのは高校生の頃だったと思います。進学先は音響関係の専門学校と決めていました。学校説明会の際、窓口の先生に「この業界は女性というだけで可能性が1/10になる。それでも目指す気持ちはあるのか?」と、なぜかかなり厳しくアドバイスを頂きました。それまで考えもしなかったのでショックは受けましたが、「ミキシングエンジニアになるには何が必要か」のリサーチを始めるときかけになりました。

#### 学生時代

ここまで読んでいただいたのに申し訳ありませんが、私は理系の大学に在籍したことはなく、「リケジョ」ではありません…。高校卒業後は大学の映画学科に進学、必須科目に物理、化学はありましたが、どれも映画技術に必要な専門的な内容でした。

映画の音を録って創る毎日はフィルムを媒体としたもので、私の想像していた音の世界より古臭く感じましたが、当時の映画技術を学ぶことができました。

また放課後は、新宿のライブハウスでPAエンジニアの見習いとして毎日夜遅くまで働きました。やはり音楽に係わっていききたいという気持ちが強

かったからかと思います。ここではミスが許されない、プロとしての仕事の厳しさを教えていただきました。しかし周りの環境は劣悪で、もし娘が働きたいといったら到底許可できないようなそんな場所でした。

#### 入社後の仕事

テレビ東京入社後は運良く志望通りの部署に配属され、以来ずっとテレビの音を制作する仕事をしてきました。もちろん最初はアシスタント業務から始めますが、局員はあまり修行する時間が与えられず、1年から2年程で音声チーフとして現場を任せられてしまいます。年上ばかりのアシスタントさんを仕切らねばならず、チーフとは名ばかりの非常に辛い時期でした。

入社したばかりの頃は映画と音楽に興味がありませんでしたが、その後担当したスポーツ中継や報道番組、アイドル番組等の音創りは大変奥が深く、面白いものでした。サッカーや野球はもちろんスカッシュやレガッタな



Jリーグ開幕当期中継現場で同期のカメラマンと



天王洲スタジオにて

どのスポーツ中継、隅田川花火・囲碁将棋や野球ドラフト会議、ディズニーシーのショーの中継など、さまざまなジャンルの音を制作しました。最終的にはやはり音楽番組を担当することが目標でしたが、テレビ東京の音楽番組は演歌が中心で、当時まったく興味がわきませんでした。しかしミキシングとしては楽器の編成が多く、非常に高いレベルのテクニクが必要とされることから、夢中で聞き込むうちにすっかり演歌の世界に魅了されてしまいました。今では曲名からソロ楽器がすぐにでてくるまでになりました。ミキシングするうえで心がけていることは、自分の好みばかりを最優先する音作りをしないようにすることです。演歌の視聴者は原曲を崩すことを余り好みません。自己満足に終わらないよう、常に演奏者と視聴者を尊重したミキシングを心がけています。

### 女性であること

学生時代の面接で厳しく諭された「女性だと1/10の狭き門」についての実感は未だ得られていません。弊社技術局での女性採用は初でしたので、局内の男性陣が扱いに迷っている気配は感じましたが、この業界の柔軟さからか、すんなり受け入れてもらった気がしています。ただおじさま上司は大変親切にしてくれていたもので、同期

入社の男性陣からは若干の嫉妬を受け、「女はいいなあ」との発言。信頼していた人でもあったので複雑な気分になりました。

年々増えているとは言え、テレビ局全体でも技術職の女性はまだ少数です。すぐに覚えてもらえますし、私のような実績では会うこともできない憧れのエンジニアを紹介してもらえるなど、利点もたくさんあります。一方、大した業績もないのに知名度のみがあがってしまう現実に戸惑いもしましたが、今は自然体でいるようつとめていきます。

この業界の一番切実な問題としては、勤務時間が不規則であること、また中継業務等では重量物の運搬が必須であることかと思えます。これは長期的に考えると女性には辛い仕事となります。体を壊して辞する女性もたくさんいました。幸い丈夫な体と心優しい先輩後輩に恵まれ、大きな怪我もせず、乗り越えることができました。

### 母親になること

妊娠・出産と仕事については多くの女性が悩むことと思います。私自身、子供を持つことを深くきちんと考えたことはありませんでした。妊娠がわかった時はやっと憧れの音楽番組を担当し始めた頃でしたので、なかなか気持ちの整理がつかみませんでした。職

場の理解と協力のおかげで、また家族のバックアップによって、最終的には同じ職種に復帰することができました。

当時の上司は三人の娘を持つ父親でもありましたので非常に理解が深く、育休中にもいろいろと相談に乗ってくれました。社内でメールでの連絡が習慣化し始めたころでしたので、お休みに頻りに連絡を取ることで、スムーズに復帰できたのではないかと思います。本当に恵まれていたと思います。

しかし復帰を焦るあまり、一番可愛い時期の娘と心に余裕を持って接することができなかったのをちょっと後悔しています。

### 家庭と仕事

正直、両立できてはいません。保育園時代、両親はもちろん、保育園の先生やお友達、近所の知り合いに預かってもらったり、会社に連れてきて上司や同僚に見てもらったりとあらゆる方にご迷惑をかけながら、やり過ごした感じです。そんな娘もどうか中学生になりましたが本当に大変なのはこれからののかもしれません。いろいろと理解してくれてはいますが…。

### 学生さんへのメッセージ

私がミキサーとして大事に思ってきたことは、常に音への興味を忘れないこと。寂しいことに純粋に映画やコンサートが楽しめなくなってしまったマイナス面もありますが…。あとは学生生活の中で出逢うたくさんの人とのコミュニケーションを大事にしていけば良いと思います。

多くの偉大な先輩たちが切り開いてくれたおかげで、女性が権利を掲げて戦う必要は少なくなり、自然体で頑張れる環境が整ってきたように思います。視聴者の半分は女性ですのでその感覚で仕事に向き合うことは自然に必要なとされているのです。ただやはり周りの助けが合ってこそその継続かと思いますので感謝の気持ちを忘れずに、肩肘張らずお互い頑張りましょう。

(2013年8月14日受付)